

# 成功バイリンガル養成に関する一考察

——在外児童への言語調査と言語転移理論・バイリンガル理論概観——

米 田 佐 紀 子

## 論文の概要

この論文は2003年9月5日に大学英語教育学会全国大会で行った発表を元に、加筆・訂正を行ったものである。最初に、バイリンガリズム研究と言語転移研究の流れを概観し、そこから、二言語使用と言語転移のメカニズムについて考察する。その後、在外日本人児童の言語現象の観察とバランスの取れた二言語併用者の養成を成功させる要因について考察する。

## はじめに

2002年、文部科学省は「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を打ち出した。目標は、日本人に対する英語教育を抜本的に改革することである。内容としては、「経済・社会等のグローバル化に伴い海外との交流が増えている中、日本人の多くが英語力が不十分なため不適切な評価や不利益を被ることがあると同時に、しっかりした国語力に基づき、自らの意見を表現する能力も不十分である。個人と国の利益のために、国際的共通語となっている英語のコミュニケーション能力を身に付けるためにも、英語力と国語力の涵養を図ろう」というものである。

筆者も、幼稚園児から大学生を教えてきた教師として、言語習得の研究者として、また二児の親として、「日本語と英語の両言語が4技能において同じように使える学習者の育成」をするという理想を持っている。Cummins (2001) は仕事や学業に必要な高い言語能力を CALP と呼んでいるが、その CALP が両言語で高い学習者を育成するということが今必要とされている。こういった中で、母語も L2である英語も伸ばすことができ、バイリンガルはモノリンガルよりも有利だという見方をしているカミンズの説は力強い味方である。その一方で彼の理論を鵜呑みにするのではなく、検証していくことも重要である。またその際、言語転移理論を踏まえることが理論の検証に大きく役立つと考える。日本語と英語に堪能なバランスの取れたバイリンガルの育成を目指すに当たり、見逃せない言語同士の影響、つまり言語転移の現象を観察することによって、二言語（多言語）習得研究を進める事になるからである。

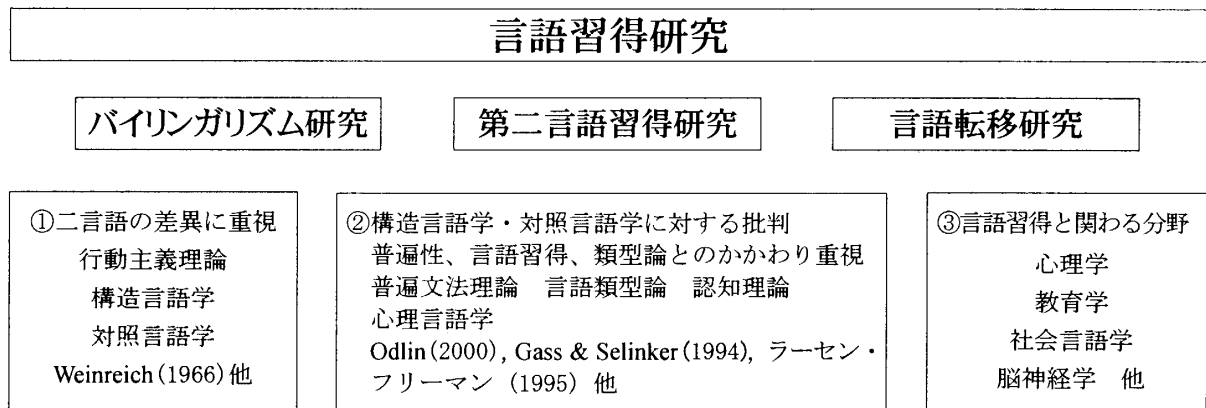
理論を検証・裏付けるために、2001年より3年間に渡ってバンクーバーの日本語補習校で OBC という方法を使って面接による言語を行ってきた。この論文では、2001年と2002年のデータに関する考察も言語転移理論・バイリンガリズム理論の検証とともに行う。

## 第1章 メカニズムの研究——バイリンガリズム研究と言語転移研究の関係諸理論

### 第1節 関係諸理論の全体像

バイリンガリズム研究、言語転移研究、第二言語習得はいずれも言語習得に含まれるものであり、それを図式化すると次のようになるだろう。

図1



以上の図では、言語習得という大きな分野の中にバイリンガリズム研究と第二言語習得研究、言語転移研究が並列し、それぞれの立場から言語習得のメカニズムについて研究していることを示している。

バイリンガリズム研究、第二言語習得研究、言語転移研究の3つの研究には大きく分けて、①行動主義理論を中心とした考え方、②それを批判する考え方、そして③この分野に影響を与える諸分野の学問がある。上記からも分かるように、二言語習得の研究をするためには、言語学だけでなく、心理学、教育学、脳神経学などさまざまな研究を視野に入れることによって言語習得のメカニズムが見えてくるのがわかる。

### 第2節 言語転移研究理論概観

バイリンガリズム研究および第二言語習得を研究するにあたり、言語転移研究はその核となるさまざまな現象を扱っており、その研究は多くの示唆に富んでいる(Gass & Selinker 1994: 7)。

この言語転移(以前は言語干渉と呼ばれていた)の研究者としては、Weinreich と Odlin が主な人物として挙げられるだろう。まず Weinreich から始め、その後、現代的な見方を概観したい。

Weinreich は構造言語学・対照分析仮説の立場から、アメリカ・ヨーロッパの言語を中心に言語接触が起きたときにどのような現象が起こるかを分析し、予測した。対照分析は二言語を比較し、その違いから生起するすべての誤りを予測することができると考えられた。しかし、言語を習慣形成の結果としてみる行動主義理論そのものが批判され、理論的基盤を失った。その背後には、予測した誤りに実際には生じないものが見られたり、仮説が予測しないタイプの誤りが見られたことなどがある(山岡1997、Gass & Selinker 1994)。しかし、対照分析は出てきた誤りの1部を後付的に

説明することができる点で現在でも有効な手段として留まっていることから、1つの方法論的選択として現在でも有益であるという見方もある(ラーセンフリーマン&ロング1991:56, 山岡1997:192)。ここで見落としてはならないのは、Weinreichの研究がすべて否定されたのではなく、彼の功績の上に現在の理論があるということである。

では、現代的な見方はどのようになっているのだろうか。Odlinは対照分析を否定しつつもその研究成果の上に立ち、チョムスキーの理論、言語類型論、認知理論、心理学、英語教育学、バイリンガル教育、社会言語学、心理言語学、脳神経学といった様々な分野からのアプローチに基づいて研究している。またOdlinに留まらず、ベーカーも、現在の研究や理論は、行動主義者の考えとChomskyの考えの中間にあると述べている(1996:111)。

山岡は「現代的な転移の捉え方は古典的な習慣形成理論から解放されたもので、この現象をより多面的に見ることができるようになっていく」(1997:194)と述べ、以下のように転移の定義をまとめている。

- <1> 習得途上に現れる過程的なもの
- <2> 第二言語使用において作用する心理的なもの
- <3> 言語使用における社会・文化的影響によるもの
- <4> 言語の有標性の作用によるもの
- <5> 普遍文法のパラメータ値設定に関わるもの

まとめて言えば、言語転移を語るには、ひとつの理論だけで見るのではなく、様々な理論と研究に基づき、多角的に検証していくことが不可欠であるということと筆者は考える。

### 第3節 音声に関する言語転移のメカニズムについての先行研究

この節では音声・音韻に関するメカニズム研究について述べていく。この分野では構造言語学的なアプローチと類型論的な言語普遍性、発達の要因の影響が議論の土台となる。母語の影響が出る音声・音韻における転移は他の構造分野と異なり、動機や英語圏での滞在年数よりも母語が何語かという事が問題になる領域である。言語転移が音声・音韻の分野で見られる場合、音声の言語間比較に母語と目標言語の音韻体系の記述と音声体系の記述を含まねばならない。

Odlin(2000)はここで音素についてMaddieson(1984; Odlin2000:120に引用)の研究を引用している。それによると、317の言語に見られる音素目録の研究による通言語的事実が次のように載っている。

- /i/ /a/ /u/を持つ言語250以上
- /b/は200近く
- /m/は300くらい
- /x/は76
- /ts/は46
- /h/は13

この事は音声には頻度が高いものと低いものがあり、低いものは成人学習者が持つ困難度とある程度相関関係を持つということを示している。

また、音韻規則については、通言語的に見て、語尾の子音の無声化が生じる頻度が高いという。この傾向は英語には見られないが、英語話者はこの規則に困難を覚えないという。つまり、有声化することは難しくても、無声化することは楽なので、外国語の習得状況においても無声化の規則が見られ、このことは、目標言語のいずれとも無関係に存在するということになる。

音節構造についてはどうだろうか。日本語が基本的に持つCVパターン（子音-母音の組み合わせ）はもっとも流布した音節型である。この事はすべての言語話者がL2においてCVを使用する可能性が高い事を示す。

また、子供の場合、発達の要因も見逃すわけにはいかない。日本語話者でも、幼児ではsの摩擦音が出せず、「おかあたん」のように発音してしまい、年齢が上がるにつれて正しい発音を習得していくことが良く見られる。

以上のように、第二言語の発音の研究には母語との比較、言語普遍性、類型論（通言語的音素の頻度数、音韻規則の自然さ、特定の音節構造への志向等が含まれる。）発達の要因が関わっていることが分かる。

#### 第4節 形態（語彙）・統語に関する言語転移のメカニズムについての先行研究

Odlin (2000: 71-75) は、意味的格（意味的役割）について、morphological caseの果たす役割に着目すると諸言語を一貫性を持って分析する事ができ、このことは語彙の意味にも用いることができると述べている。これを第二言語習得で見ると、(1)語形が似ているから学びやすい/学びにくい (2)語形は似ているが意味は異なる（落とし穴となる）などの傾向が見られる。

またこのことは、言語習得と言語普遍性からも説明でき、以下のようにまとめられる。

- ①語彙には意味情報の普遍的な格がある。
- ②子どもの語彙能力の進化には認知的発達の大きな進歩が伴う。
- ③語彙意味論の分野で見られる誤りのうちの幾つかは、すべての言語習得状況の中で作用する過程の普遍性を示す。

上記③を「学習過程的転移」として山岡（1997: 198-200）は、外国語学習の際に、発達段階に長くどまり、次の段階への移行が遅れる現象と、一般的な発達過程には見られない道筋をとる現象が見られることを指摘し、これらはいずれも母語の影響により発達過程上に現れるものであるとしている。具体的に、疑問文や否定文の構造を挙げ、発達段階の中で第二言語のある構造が学習者の母語において用いられる形式に相当する場合、この学習者はそのような形式を母語の中に持たない学習者よりもその段階に長く留まり、また、目標言語のある形式に相当するものが学習者の母語にない場合、その形式を発達させる過程において、一般的な発達過程には見られない道筋を経由してその形式が習得されることが観察されるとしている。（山岡1997: 195-196）

次に、転移可能性について見ていこう。

転移可能性から見た文法関係における誤り（負の転移）は、目標言語からの逸脱を含むのでその確認は簡単である。主に次のようなものが挙げられる。

- (1) 表出不足＝回避 目標言語の話者に比べて使用頻度が少ない用例や構造が見られる。
- (2) 表出過剰 正の心理的構えが作用する場合には、過剰表出につながることもある。
- (3) 表出の誤り
  - ①代用：時には母語形式を使用する
  - ②翻訳借用：母語の構造を反映する
  - ③構造の改変
- (4) 解釈の誤り 目標言語の語順の型や音組織が異なる場合や文化的前提が異なる場合に起こる。
- (5) 語順における厳格さの相違 拘束形態素の体系への依存は柔軟な語順を持つ言語に良くある。
- (6) 厳格さの転移可能性 厳格さは転移しうる。＜例＞語順が柔軟な言語を母語とする話者は英語の語順が極めて厳格であるのに拘わらず、英語を話すときに数種類の語順を使用する可能性がある。

上記以外にも節内部の語順や否定の語順について、言語普遍性や転移の兆候が見られるという。以上の研究から分かるように転移、言語普遍性、発達段階等様々な要因を見ていくことで、言語転移発生のメカニズムが説明できることが分かる。

## 第2章 バイリンガリズム研究が示すもの

カナダの心理学およびバイリンガル教育学者であるカミンズは「二言語相互依存説」を唱えている（Cummins 1978 & 1984；中島2000に引用）。彼は、「認知・学力と関係の深い深層面では、共有面があり、L1を強めればL2も強まるし、またL1で習得された認知・学力はL2でも活用できる。つまり、認知・学力と関係の深い深層の言語面では互いに影響しあい、転移が起こるため、1つの言葉を強めると相乗効果でもうひとつの言葉も同時に強まる傾向がある。」と述べている（中島 2000に引用）。この見方が正しければ、従来の第二言語教育批判に対して、第二言語を第一言語と同じように習得させる必要が高まっている現代、それを推進しようとする者にとっては心強いものである。

また、カミンズ（1984；ペーカー1996に引用）は、言語能力をまとめてとらえるのではなく、2つの能力として捉えている。1つは、「言語を話す上で文脈（コンテキスト）の助けと支え（瞬時のフィードバック、合図、手がかりなど）がある場合に働く」とされる言語能力を「伝達言語能力（BICS: basic interpersonal communicative skills）」と呼び、もう一つを「コンテキストの支えがない(context reduced)学業的な場面で働く」とされている言語能力を「学力言語能力（CALP: cognitive/academic language proficiency）」という用語で表現した。Cummins（2003）によると BICS の習得には2、3年でネイティブスピーカーレベルに達するのに対し、CALP は5-7年かかると述べている。今後日本で求められる英語力というのはこの CALP である。この両言語がバランスよく成長するか、両言語

ともが頭打ちになるか、といういわゆるセミリンガルの問題について、カミンズは「しきい説 (threshold hypothesis)」という仮説で、低いほうのしきいより下では認知的にマイナスを被るが、上のしきいを超えると認知的に発達すると述べている (ジョンソン 1999: 463-464)。

次の章では言語能力調査から CALP の高い学習者を育成するにはどうしたらよいかを言語調査から検討していく。

### 第3章 バイリンガル言語能力調査から見た CALP の高い二言語併用者

本章ではカナダにいる日本人の子供たちの二言語の言語能力はいかなるものかを理論と照らし合わせて考えていく。筆者は2001年から3年間に渡って、バイリンガルテストをバンクーバーの日本語補習校で行ってきた。そのうち、2001、2002年の2年間の調査概要・結果についてまず述べ、その後に考察をしていく。

#### 第1節 調査の概要

この調査は Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children (以下 OBC と略す) を使用して行った。OBC とはトロント大学準教授 (当時) の中島和子が、カナダにおける日本語教育 (日本語維持) のためにカナダ日本語教育振興会 (CAJLE) のグループプロジェクトとしてカナダの継承語プログラム (Heritage Program) 助成の一貫として8年間かけて開発したものである。

OBC は面接式の子どもの会話力テストで、日本語と英語のテストを同時に実施することにより、2つの言葉の発達状況を調査することを目的とする。語学力の基礎である会話力を「基礎」、「対話」、「認知」の3面から調べ、どのようなところが強いかわか弱いかを診断するものである。

調査内容は OBC の様々な質問の中から絞って作成した。米田らが使用したタスクは次のとおりである。タスクによっては刺激となる絵を使用する。被験者と面接官は斜め向かいに座り、できるだけ緊張させないよう話しやすい雰囲気で行う。

##### <調査内容>

- 「導入会話」 氏名、誕生日、年齢、家族構成、使用言語、友人、学校、帰国予定などに関する質疑応答。
- 「語彙タスク」 32個 (2001年)、34個 (2002年) の日本語と英語の語彙について絵を見せて答えさせる。名詞、形容詞、動詞など。中には受身や日本語と英語での使用で誤りやすいと思われるものが混ざっている。
- 「基礎タスク」 生物、無生物の存在描写や好きなスポーツ、将来の夢など、自分の生活に関わるもの。
- 「対話タスク」 電話で問い合わせをする、伝言を受け取る、ねだるなどの場面設定をし、ロールプレーをする。
- 「認知タスク」 お話をする、公害、消化、言語や国の比較など場面から離れた話題について適切な語彙を用いて説明する。

上記について、それぞれの項目に答えられるか否かを判断すると同時に、発音・話の筋道・適切な語彙・段落等、それぞれの場面に応じた観点から評価をしていく。

調査は、2001年は湯本和子（神奈川県立外国語短大）、鶴田君江（東洋大）と米田の3名で、また2002年はESLの教師をしているカナダ人2名、日本人英語講師1名と米田の4名で行った。

調査の前には打ち合わせを綿密に行い、子どもへの態度や、座る位置、質問内容などについてばらつきが出ないように細心の注意を払い、MD（ない場合はテープ）に録音した。

調査結果については、会話を書き起こしてから、評価をし、ほぼ半年後に補習校を通じて保護者へと評価結果を送り返すという方法を取る。

調査対象は、日本語補習校に通う小学生希望者である。2001年は17名、2002年は13名の合計延べ30名が受けた。被験者の中には両親が日本人で駐在のためカナダに渡ったケース、両親とも日本人で永住のためカナダに渡ったケース、片親が外国人で永住のためカナダに渡ったケースとほぼ3タイプに分けられる。面接を受けた子どもたちの滞在期間は1年ほどのものから10年以上の者があった。保護者には補習校を通じて、事前に調査の目的を説明し、論文等への掲載についても承諾を得た。

## 第2節 調査結果と分析

過去2年間の調査のうち、今回の論文ではBICSがネイティブスピーカーなみになるという2、3年を過ぎ、なおかつ日本語もある程度大人に近づいていると考えられる高学年、そして両親とも日本人という条件で絞った。ここでは、該当する次の6人の被験者について論じていく。

被験者の概要は以下の通りである。便宜上、S1、S2のように番号を付すこととする。

表1 被験者の概要

被験者	性別	年齢	補習校学年	入国年齢	滞在期間
S1	男	11	6	1.7	10
S2	男	11	6	8	3
S3	男	11	5	7	3.1
S4	女	11	6	5	6
S5	男	12	6	6	6
S6	男	12	6	6	6

まず、発音については3年以上の滞在者に日本語音はほとんど聞かれなかった。

次に、語彙タスクについてみていく。語彙は2001年は32個（はさみ、引き出し、黒板（白板）消し、枝、幹、かかと、（像の）鼻、（山の）頂上、医者、看護婦、救急車、（飛行機の）羽、（靴を）履く/脱ぐ、（帽子を）かぶる、（スープを）飲む、運動/体操する、野球をする、叱る、叱られる（受け身形）、頭が痛い（頭痛がする）、冷たい、寒い、暑い、熱い、厚い、薄い、細い、高い、安い、（背が）低い、長い、短い）、2002年は、上記32個に加えて2個（車に引かれる、太い）を加えた。その中で上記6人のうち、2人以上が間違えた（分からなかった）語彙を表1に挙げ考察する。

米 田 佐 紀 子

表2 語彙タスクで6人中2人以上の誤りのあった語彙と人数

語彙	日	英	語彙	日	英
drawer 引き出し	3	5	scold 叱る	0	2
eraser 黒板消し	2	1	be scolded 叱られる	0	5
(tree) trunk 幹	5	2	get run by a car 車に引かれる	2	2
put on a hat 帽子をかぶる	2	3	cold (ice) 冷たい	2	0
eat soup スープを飲む	1	3	thin (book) 薄い	4	3

ここでは、語彙の中で特に日本語、英語ともに「たんす」はわかっても、「引き出し」は分からない、また、「木」はわかるがその部分にあたる「幹」はわからないという子どもの数が目立った。このことは語彙の上位語は習得しやすいが下位語については習得しにくいことを表していると考えられる。

また受身が作れるか否かについて、日本語の「叱られる」は問題ない反面英語で5人が作れなかった。英語では多くの被験者が“She is mad.”という表現を多く用い、「誰かが叱られる」というよりは“He is sad”と答えた。“mad”する人と、それによって“sad”になる人と考えたのかもしれない。

形容詞については「細い」鉛筆は言えても、「薄い」本や“thin book”という言葉が思い浮かばない子どもが多かった。あまり日常的に使用しないためと考えられる。

次に各タスクの結果を一覧にして見てみよう。各タスクについての評価は、左の項目と内容についてテスターが評価をする。評点は「1」の「全く理解できない」から「5」の「よくできる」までの5段階でつけられる。以下にそれぞれのタスクについての結果を示す。この時にどの文型を使用したらどの評価かなどの細かい評価基準はないのでテスターの判断にゆだねられる。

表3 三面評価一覧

		S1		S2		S3		S4		S5		S6	
		日	英	日	英	日	英	日	英	日	英	日	英
	語彙 (32~34個中の正答数)	29	27	30	29	30	26	22	26	27	28	27	23
基礎タスク	評価項目	評価内容											
	2言語の分化	2言語を混ぜずに話せる											
	発音	自然な発音で話せる											
	文の生成	自分で文が作れる											
	文法的正確度	文法的に正しい文で話せる											
	文のタイプ	簡単な文型だけでなく、複雑な文型も使える											
	小計	25	25	25	25	25	25	17	19	25	25	21	21
対話タスク	聴解力	テスターの発話・質問を理解する											
	会話への参加態度	積極的に会話に参加しようとする											
	対話の流暢度	テスターとのやりとりがスムーズである											
	タスク達成度	課せられたタスクがこなせる											
	話体	「です・ます体」「だ体」の区別、丁寧表現が使える											
	小計	25	25	18	17	22	25	15	15	25	25	25	23



成功バイリンガル養成に関する一考察

認知 タスク	話しのまとめ	筋の通った話し、理由、説明、 意見が言える	5	5	5	5	5	5	2	3	5	5	3	3
	内容の豊富さ	話し、理由、説明、意見内容が 豊かである	5	5	5	5	4	4	2	3	5	5	2	2
	語彙の質	内容に見合った語彙を選択して 使える	5	5	5	5	4	4	2	3	5	5	2	2
	段落とその質	段落意識がはっきりしている	5	5	5	5	5	5	3	3	5	5	2	2
	小計		20	20	20	20	18	18	9	12	20	20	9	9
合計		70	70	63	62	65	68	41	46	70	70	55	53	

2001年、2002年とも日本人のテスターが書き起こしや MD(テープ)に基づいて点数を話し合っ  
て出したものを元に点数化した。一部、2002年のものが終わってから2001年のものに変更を加えてある。

ここで長期滞在と中期滞在者に分けて見ていく。まずは6年以上滞在の S1、S4、S5の3人について  
見てみよう。S1も S5も会話能力では各タスクとも満点で分かるように、はきはきと切り切りの  
文で話しをする傾向が強かった。それに対し、S4は返答に単語での応答が多く、話し方も自信がな  
さそうであった。3人とも上記の傾向は英語でも日本語でも見られた。S1は1歳で渡航しており、  
日本語の維持について家庭での日本語を使用し、多くの日本語の本を読んでいることが大きな影響  
を与えていると考えられる。S5も難しい単語を使用するなど、日本語の維持がきちんとされている  
と感じられた。その一方、S5はイントネーションが英語の影響ではないかと思われる部分も見られ  
た。S4は家庭での言語について、日英混合と言い、使いやすいほうを使うという態度のようだった。  
語彙数が日英ともに少ないのも気になった。

次に滞在3～4年の S2、S3、S6について見てみよう。S2は滞在3年でも基礎会話に困ることは  
なかったが、対話タスクでの受け答えに支障がみられた。通常では基礎・対話とできて、認知タス  
クができないということがあるが、S2については、読書が好きなせいか、認知面では好成績を収め  
た。4年間滞在している S3は対話に積極的に関わろう、課題をこなそうとする態度が日本語で少々  
欠けていたが、日本語と英語のバランスや内容としてはうまく二言語を成長させていると考えられ  
る。S6も S3同様4年間の滞在であるが、基礎タスクの文の生成や助けを借りずに文を自分から作る  
という箇所では3点という点がついた。また、認知面では年齢相応の語彙や文型が両言語ともに欠け  
ている点から CALP を強化する必要があることが分かる。

では、ここで、点数ではなく、具体的にどの様な文例が見られたのか示す。下線部は難しい語彙  
や文型を使っていると考えられる部分、斜体字は間違っている部分である。

<日本語>

- ① たぶん、日本人の友達だと思ひます。なぜなら、補習校にもいっばいいるし、結構顔が広いと  
言うか、中学一年生などの人も知っているので、結構日本人の人の方が、友達のほうが多いと  
思ひます。(導入会話 S5)
- ② トイザラスに新しい自転車がとられたそうですよ。<「入荷した」の意味> (対話タスク S1)
- ③ (3びきの子豚に出てくる狼が)火の中に入っちゃって、で、もう生きなかった。<「死んだ」  
の意味> (認知タスク S4)

<英語>

- ① The earth is crying because they are cutting down the trees. ... (省略)...just get the amount that you supposed to get for making houses and papers. (認知タスク S2)
- ② A Smith called...and she...he wants you to call him back now. (対話タスク S5)
- ③ One of the pig, pig's house was blew, flew away by the wolf, and second pig blew it away from the roof, and the third pig house wasn't broken because it was brick and cement. (認知タスク S6)

これらを見ると、文法的な誤りも見受けられるが、同時に、ほとんどの被験者が相手に意図が伝わる言い方をしていることが分かる。ここから、3年以上滞在の子供たちは相手に自分の意図を伝える BICS と、それだけではまかないきれない場合のストラテジー能力を身に付けていると考えられる。

CALP が必要となる、「認知タスク」における、環境汚染の問題に対して、滞在歴3年の S2は、...is ... because... という文型を使って、原因と理由をきちんとした形で述べている。

その一方、文形の中でも受身形については、上記英語③の文や語彙タスクの誤りが多かったところから、受身形が場面によっては作れない子どもが多いのではないかと推測できる。つまり、“... is broken” など頻繁に耳にするものは塊として覚えているのに対し、*be blown away* や *be flown away* のように、その場面に合った語彙から受身を作ろうとすると誤りを犯すという傾向があるようである。

### 第3節 結論と今後の課題

3年以上のカナダ滞在日本人児童への調査結果から、場面に適切な語彙や文型の使用は滞在年数とはあまり関係なく、子供を取り巻く言語環境（家庭での言語や読書）が大きく関わっていることが分かった。しかし、いずれの子供も日常会話のレベルでは、どちらの言語の発音も良く、表面的には第二言語が流暢そうに見えた。その一方で、完全な文として話すことを要求された段階で語学力の差が大きく出ることが分かった。

また、同時に OBC を使用した評価をするに当たって、客観的・実証的な裏づけが必要だと感じている。BICS と CALP の区別を場面やテーマで区別するだけでは、この二つの概念がどのように言語として具体的に表現されるのかがあいまいで、これを使った評価での確な検証がどこまでできるかわからない。それぞれのテーマについて、どの文型や語彙ならばどこまでが BICS でどこからが CALP なのか、どの年齢ならどの語彙・文型が使用できればよいのかという客観的な評価基準を今後作成していく必要がある。そのためには、それぞれの言語のモノリンガルへの調査が必要と考える。

## まとめ

最後に結論として CALP を成功させる要因、言語転移の検証、カミンズのバイリンガリズム理論の検証についてまとめていく。

まず、言語転移理論についてであるが、言語転移理論の検証については引き続き詳細に見ていく必要がある。言語調査では、滞在3年の子供でも、関係節など複雑な文を正しく使うことができることが分かったが、どの段階ならばどのような現象が見られ、その理由はなぜなのかという点はまだ分からない。さらに検証していく必要がある。

バイリンガル理論については、カミンズの理論の正当性が裏付けられたのではないかと考える。つまり、滞在期間や性格よりも読書の質や量また家庭での言語使用の影響が大きいことが調査で示された。二言語の伸長がうまくいっていない例があるように、単に長い間触れさせるだけでは CALP は育たないことも分かった。

Cummins (2003) が言う様に、成功バイリンガルを育てる鍵は以下のとおりにまとめられると考える。

- ・小さいころから2言語に親しむことによって、年齢相応の言語操作訓練が多くつむことができ、柔軟な思考を養うためにも重要である。
- ・両言語での高い CALP の育成のためには物語、原因と結果、事実と意見、歴史的事実などアカデミックなものを扱った読み書きを二言語で行う。
- ・家庭で二言語をきちんと区別して使うこと、そして両文化に対して肯定的な態度を持つことが大切である。

以上の事柄は、在外バイリンガル児童だけでなく、両言語に堪能な日本人を育成しようとする日本での英語教育にもあてはまるだろう。アカデミックなものを口頭でも、読書でもライティングでも扱えるような訓練を心がけ、早いうちから読書（音読）を取り入れていくことが肝要である。

## 引用・参考文献

CUMMINS, Jim. (2001). *An Introductory Reader to the Writings of Jim Cummins*.

Multilingual Matters, Ltd.

CUMMINS, Jim. (researched in January, 2003). *BICS and CALP*. [on line] Available:

<http://www.iteachilearn.com/cummins/bicscalp.html>

GASS, Susan & Larry Selinker. (1994). *Language Transfer in Language Learning*.

Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

JACET バイリンガリズム研究会「大学英語教育への提言--CALP in English--」『JACET 月例研究会』

2003年1月25日 東京電機大学

ODLIN, Terrence. (2000). *Language Transfer*. Cambridge University Press. (オドリン、T. 『言語転移』丹下省吾訳 リーベル出版 1995)

米 田 佐 紀 子

- WEINREICH, Uriel. (1966). *Languages in Contact*. Mouton & Co. (ワインライヒ、U. 『言語間の接触—その事態と問題点—』 神鳥武彦訳 岩波書店 1976)
- YONEDA, Sakiko. (1997). A Case Study of Language Transfer: An Investigation into the Influence of L2 on L1. *Socio-Environmental Studies No. 2, Graduate School of Socio-Environmental Studies of Kanazawa University*. pp. 171-184.
- コリン・ベーカー著 バイリンガル教育と第二言語習得』岡秀夫訳・編 大修館書店 1996
- ジョンソン、K、ジョンソン、H 著『外国語教育学大辞典』岡秀夫監訳 大修館書店 1999
- 中島 和子著『バイリンガル教育の方法』アルク 1998
- 中島 和子著『子どもの会話力の見方と評価—バイリンガル会話テスト(OBC)の開発—』カナダ日本語教育振興会 2000
- 山岡 俊比古著『第二言語習得研究』桐原ユニ 1997
- 吉田 研作『小学校英語の指導資格をどうするか』講演 2003年4月25日 特定非営利活動法人小学校英語指導者認定協議会(当時申請中)
- 米田佐紀子著「二言語併用者個人についての研究—Weinreich の *Languages in Contact* とその後の研究—」『北陸学院短期大学紀要 第31号』1999. pp. 145-157.
- 「言語干渉基礎研究—Weinreich の *Languages in Contact* に見られる言語干渉の定義・研究意義と音声干渉の研究—」『金沢大学大学院社会環境科学研究科紀要 社会環境研究第5号』2000. pp. 55-65.
- 「文法に関する言語転移基礎研究—Weinreich の *Languages in Contact* における文法転移研究を中心として—」『北陸学院短期大学紀要 第32号』2000. pp. 131-139.
- 「Weinreich と Odlin の比較研究から見た言語転移メカニズムの研究」『北陸学院短期大学紀要 第33号』2002. pp. 121-135
- ラーセン-フリーマン, D. & ロング, M. 著『第2言語習得への招待』牧野 高義他訳鷹書房弓プレス 1995